



奏

官秘第一八五號

内申

大正四年五月十七日

岡山縣知事 笠井 信

内務大臣子爵 大浦兼武殿



四三
八〇

贈位ノ件

今秋冬ノ間ニ於テ行ハセラルヘキ御大禮ニ方リ皇室
 國家ニ對シ精忠ヲ抽テタルモノニ對シ贈位ノ御沙汰
 可有之趣ヲ以テ御査内申方御達ニヨリ別紙二名
 ヲ選ビ贈位ノ義及内申候是等人士ニシテ此恩典
 ニ浴スルヲ得ル當ニ聖恩ノ枯骨ニ及フノミナラス将来
 人士ノ模範トシ可相成候ニ身相与御沙汰相成候
 様御詮議相成各別紙奉 啓書相添此致及内

岡山縣

申 兼 也

追々 文化風教ノ為ノ貢獻ニタルハ 文部大臣貴大臣
連名ニテ 文部大臣ニ 追達ニ 殖産興業ノ為ノ 尽
瘁ニタル者ハ 農商務大臣貴大臣連署ニテ 農務
務大臣ハ 追達致候條者申添也

故從五位下池田長發事歷

外國奉行正使トシテ歐洲ニ派遣セシ横濱長崎箱館ニ流シテ鎖港ヲ談判シ令々和意ニモシテ通入程儀
公使ハ所々ニテモ各回ノ下屬運命ニ礙リテ是レモシテ
ヲ原ニ在リ備前侯池田氏
テ昌平黌ニ入り才學文
過ニ其正使ニテ流シテ
賜有ハテ贈正四位下
安政五年幕府ノ大老井伊直弼勅准ヲ經ス外國
ト條約ヲ訂結シ横濱長崎箱館ノ三港ヲ開キ互市場
トス是ヲ鎖港攘夷ノ論紛々トシテ天下騷然タリ文久
三年將軍家茂入朝シ天皇親征ノ議起リ大和及ヒ
但馬ノ擧アリ幕府ハ當時本邦駐劄ノ各國公使ニ鎖
港ノ事ヲ談判セリ公使ハ唯々之ヲ一笑ニ付スルミ止ムヲ得ス
使ヲ訂盟各國ニ派シ直ニ君主ニ談判スル所アラントス是レ
全ク一時ヲ糊塗シ因循姑息ノ責ヲ免ルハ窮策ニ外

池田長發

故從五位下池田長發事歷

天保八年七月二十三日江戸ニ生ル世々幕府麾下ノ士
ニシテ其采邑ハ備中後月郡井原ニ在リ備前侯池田氏
ノ支族ニシテ筑後守ト称ス曾テ昌平黌ニ入り才學文
章夙ニ儕輩ニ超越ス

安政五年幕府ノ大老井伊直弼勅准ヲ經ス外國
ト條約ヲ訂結シ横濱長崎箱館ノ三港ヲ開キ互市場
トス是ヲ鎖港攘夷ノ論紛々トシテ天下騷然タリ文久
三年將軍家茂入朝シ天皇親征ノ議起リ大和及ヒ
但馬ノ擧アリ幕府ハ當時本邦駐劄ノ各國公使ニ鎖
港ノ事ヲ談判セリ公使ハ唯々之ヲ一笑ニ付スルミ止ムヲ得ス
使ヲ訂盟各國ニ派シ直ニ君主ニ談判スル所アラントス是レ
全ク一時ヲ糊塗シ因循姑息ノ責ヲ免ルノ窮策ニ外

ナラス幕議一決レ使節ヲ選フニ當リ其人ヲ得ス終ニ長
發ヲ擢テ外國奉行正使トシ從五位下ニ叙シ河津三郎
太夫ヲ伊豆守ニ任シ外國奉行副使トシ河田貫之助ヲ
相模守ニ任シ監察トシ各國ニ派遣スルニ決ス

是歲十二月二十九日長發以下三十三人佛國軍艦「リモンズ」
弍ニ搭シ翌元治元年三月十六日佛國巴里ニ着ス其
二十八日始テ皇帝「ナポレオン」三世ニ謁ス儀仗整肅待遇
優渥ナリ謁後外務大臣「ドロワンデロイス」ト談判ヲ開キ先ッ
井戸ヶ谷ニ於テ佛國士官殺害事件ノ謝辞ヲ述ヘ鎖
港ノ事ニ論及ス當時一行ノ組頭タル田邊太一ハ其
著幕末外交談ニ「ロイス」ノ主張スル所ヲ記セリ其一節
ニ曰ク

横濱鎖港ハ承諾レ能ハサルミナラス是レ却テ日本

政府ノ爲メニ成ルマシ且ツ最前西都西港延期ノ談
判允諾ノ際豫約セシ條件ニ於テ日本政府ニテ
爾後取行フヘキ約束ヲ履行シ能ハサレハ何時
タリトモ其允諾セシ約束ヲ廢シ其開市開港ヲ
促スヘシト云ヘル旨ニ基キ數度ノ殺傷沙汰殊ニ下ニ
開ニテ謂ハレナク通航ノ外國船ヲ砲撃セシ如キハ其
允許ヲ引戻スニ充分ノ理アルヲ以テ既ニ英國トモ
相結ラ之ヲ促スニキ決議ヲ為セシ程ナレハ既ニ開キアル
横濱ヲ鎖サンナトトハ思ヒモ寄ラス左レト其開期ヲ
促スコトハ隨分ノ困厄ナルヘシトハ推察セサルニアラサレハ
茲ニテ今開キアル三港即チ横濱長崎箱館トモ輸出
入貨物ニ永久課税スルコトナク自由港トシテ外國
ニ對シ厚意ヲ示サルコト只今使節ノ權ヲ以テ約
束シ得ハ猶英國ニモ示シ合セテ之ヲ見合ストモ妨ク
ス云々

岡山縣

對手ノ主張ハ斯ノ如クニシテ頑トシテ鎖港ノ事ヲ容レ
ス滯在二月ノ間前後九回ノ談判ヲ為シ反覆辯論
スル所アリシモ議終ニ諧ハス且ツ其文物燦爛トシテ
武備整頓スルヲ見テ大ニ感悟スル所アリ是ニ於テ斷
然歸朝スルニ決シ一死以テ九重ニ哀訴シ開國ノ止
ム能ハサル所以テ陳セント欲シ遂ニ巴里ヲ去ル去ルニ
臨ミ一通ノ約書ヲ交換ス今日巴里ノ廢約ト稱スル
モノ是レナリ此條約ハ固ヨリ我ニ不利ナルモノニシテ下ニ
開砲撃ニ對スル償金及輸入品減税等ノ事ナリ
然レトモ此條約ノ為メ各國ヲシテ長州聯合砲撃手ノ
企圖ヲ猶豫セシメタリト云フ

七月十八日一行横濱ニ着ス直ニ閣下ニ伏シテ朝幕ノ
間ヲ調和シ以テ開國ノ國是ヲ定マンコトヲ期ス幕府
ハ朝廷ヲ憚リ其上陸ヲ許サス長發屈セス直ニ江戸
ニ入ル其夜本職ヲ禡ヒ食禄ノ半六百石ヲ削リ蟄居ノ
嚴遣ヲ蒙リ副使以下組頭ニ至ルマテ逼塞又ハ閉門ノ罰
ニ處セラレタリ此時長發及副使監察ノ三人連署シテ歸
朝ノ理由ヲ陳シ開國ノ要議五條ヲ建議スルコト縷々
數千言其ノ要目ヲ掲ケレハ則チ左ノ如シ

第一 辨理公使ヲ歐洲各國ニ被差置度候

第二 歐洲ニ無之宇内獨立ノ邦國ニハ何レモ
和親條約御取結ヒ相成代謀代交ノ御方
略有之度候

第三 海陸二軍ノ方法ハ勿論治國經濟等ノ道

西洋ノ所長ヲ被爲取候爲メ留學生御
遣シ相成修行爲仕度

第四 西洋諸國新聞社ノ通信相聞キ彼我ノ
事情相通候様仕度

第五 御國民自在ニ外國ニ相越商賈ハ勿論
彼方學問事情爲心得候様仕度

佛國公使使節ノ歸朝ヲ聞クヤ直ニ幕府ニ對シ
先ニ使節ト締結セル巴里條約ノ實行セラルヤ否ヤ
ヲ向テ幕府ハ之ニ對シ使節ハ權限ヲ踰越シタルヲ
以テ之ヲ罰シ猶ホ其條約ハ採用セスト答ヘタリ是ヲ
以テ條約ハ廢棄消滅シテ效力ナキニ至レリ故ニ廢約
ノ名アリ

慶應二年三月特旨ヲ以テ長發ノ罪ヲ赦シ勝安

房守木下大内記木村兵庫頭等ト共ニ海軍奉行ニ
列ス王政復古ニ及ヒ采邑并魚ニ就カント欲シ途次岡
山ヲ過ク宗藩ノ旨ヲ承ケテ此ニ留リ又タ世ト相聞セス
明治十二年九月病テ没ス齡四十三歳

長發ハ賢明達識ノ士ナリ必スヤ内外ノ形勢ニ察シ
鎖港ノ行ハレ難キハ固ヨリ知得セシ所ナルシ而シテ幕
府使節ノ派遣ハ一時因循姑息ノ責ヲ塞クノ窮策ヲ
ルハ又固ヨリ知得セシ所ナルシ然ルニ大任ヲ負フテ遠ク異
域ニ至ルモノハ他ニ其人ナク止ムヲ得サルニ出テタルハ當時ノ
事情ニ照シテ明ラカナリ至レハ議果シテ諧ハス其使命ヲ
全フスル能ハサルハ實ニ勢ノ烈ラシムル所ナリ是レ決シテ長
發ノ罪ニ非ス幕府ノ罪ナリ長發ハ唯糊塗政策ノ為ニ
一身ヲ犠牲ニ供シタルノミ縱令此此時何人ヲシテ長發ニ

岡山縣

代ラシムルモ談判上長發ニ過クルノ成功ヲ望ムハカラサルハ
識者ヲ待テ後キニ知ラサルナリ殊ニ建言五條ノ如キハ文
明ノ曙光ヲ導キ開國ノ國是ヲ闡明シタルモノナリ其書ハ
直ニ天下ニ傳播シ世ノ迷夢ヲ警醒シ開國ノ何事ヲ
ルカヲ知ラシメタルハ普ク人ノ知ル所トス未タ數年ヲ出
テサルニ其建議スル所ハ盡ク實現シテ事實トナリ以テ
文明ノ光輝ヲ發揮シ終ニ訂盟各國ト相對立
スルニ至ル長發ノ事蹟ハ實ニ我カ開國史上没ス
カラサルモノナリ